

# 『雨月物語』論

—— 所収九編相互の関係性について ——

三 浦 一 朗

はじめに

一、現実状況に対する複眼的な認識態度

二、現実の不可測性への関心

三、義士烈女たちの不遇

四、罪惡を犯した者たちへの眼差し

五、『雨月物語』所収九編相互の関係性

本稿では『雨月物語』所収九編が相互にどう関わり合うのかについて論じた。九編は各々が示す関心や問題意識のあり方から概ね三つの作品群に分かれる。①「貧福論」や「仏法僧」に見られる現実の不可測性に対する強い関心は、人は望まざとも不可避免的に道を踏み外しうるという無気味な現実認識を示す「吉備津の釜」において、為すべき道と人間の「性」との関係を問うことへと発展を見せる。その「吉備津の釜」の作品世界はさらに、②よく美徳をなした人間が報いられることの余りに少ない世の不条理を詠歎的に描く「菊花の約」や「浅茅が宿」、また、③悪は悪と見定めつつも罪を犯した者たちに対して柔軟な人間観を示す「白峯」「夢応の鯉魚」「蛇性の姪」「青頭巾」へと連続する。その全てに、不条理さを抱えた現実状況に対する複眼的な認識態度が通底し、端々に人間を見る眼差しの優しさ、温かさが滲む。これが本稿の提示する『雨月物語』全体の見取り図である。

## はじめに

『雨月物語』について、私はこれまでに所収九編を個々に取り上げて作品論を行ってきた。<sup>①</sup>ここではそれらの拙稿を踏まえ、言わばその総論として、所収九編は相互にどのようなに関わり合うのか、『雨月物語』という作品が総体としてどのように捉えられるのかという点について考えたい。

『雨月物語』所収九編相互の関係を論じた先行研究は意外に少ない。この素朴な問いはもっと論じられて良いと思う。

『雨月物語』所収九編相互の関係性について論じた主な先行研究として、次の諸氏の見解を挙げられる。私なりに整理して、箇条書きにする。

・前の編の主題やモチーフなどが後に続く編のそれを連鎖的に呼び起こすように、円環状に繋がっていると  
高田衛氏説（中村幸彦・高田衛・中村博保校注訳『日本古典文学全集 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』（小学館、1973・12）「解説」、50～55ページ）

・九編はいずれも「執着の文学」として把握できるとする  
浅野三平氏説（同氏校注『新潮日本古典集成 雨月物語 癡癡談』（新潮社、1979・1）「解説」、245～254ページ）

ジ)

・九編は「作者の内奥」における「自己発見」の運動に対応して、外的な「自然」としての社会から内的な「自然」としての自己の心への往還となるように配され、全体で近世的な世界像の表現になっているとする青木正次氏説（同氏著『講談社学術文庫 全訳注 雨月物語（下）』（講談社、1981・6）の解説のうち「続『雨月物語』の世界」、318～322ページ）

・「個」と時代や社会との葛藤を彼岸と此岸との関係性の中に描いてきた他の八編の寓話性を、書き手が自ら否定し去るものとして「貧福論」が巻末に置かれたとする田中厚一氏説（「否定された〈物語〉——「貧福論」の悲しみ」（同氏著『雨月物語の表現』、和泉書院、2002・12）、227～234ページ）

・『雨月物語』において怪異は秋成の「執念」「執着」が実体化するための必然だったとする広末保氏の見解（『雨月物語の文芸性』、『国文学』4・7、1959・6）を踏まえ、すれ違う心の悲劇が描かれる『雨月物語』前半には、心の一致は可能なのかという問題へのこだわりがあり、後半には、美や色への没入を執拗に描きながら、一方ではそれを冷静に相対化する姿勢が見られるとする井上泰至氏説（同氏著『角川選書 雨月物語の世界』

このうち高田氏説は、「浅茅が宿」と「夢応の鯉魚」、「仏法僧」と「吉備津の釜」、「青頭巾」と「貧福論」などの連続性を説明する際に無理がある。また、作品間の連関性をどの水準で考えるのか、それをどのような基準で認定するのが一定でないために恣意性を免れないという根本的な問題がある。浅野氏説は極めて明快だが、他編のようにには主題が執着と深く関わりを言えない「仏法僧」「貧福論」をうまく位置づけられない。青木氏説では、まず、個々の作品が作者内面における自己発見の運動に対応しているという把握の妥当性が疑問視される。青木氏自身その「位置は特別である」と言わざるをえないように、少なくとも「貧福論」にそうした要素がないのは明らかであろう。また、そうした作品把握を前提とした、社会から自己の心への往還という図式的理解も抽象的で、個々の作品世界との具体的な対応関係が不明瞭である。田中氏説は、結局のところ『雨月物語』の中で「貧福論」を孤立させており、「貧福論」の作中での位置づけや所収九編相互の関係性の把握としてなお不満が残る。井上氏説は、書き手の執念、執着という観点から作品に描かれた怪異を統一的に把握しようとしたものだが、心の一致は可能かというこだわりや、

美や芸術、ないし色欲への没入とその相対化という観点では、やはり「貧福論」を位置づけられない。

これらの諸説を通覧して明らかのように、『雨月物語』所収九編が相互にどのように関わり合うのかについて論じる際に大きな鍵となるのは、「貧福論」をどう位置づけるかという問題である。本稿ではまず、『雨月物語』巻頭を飾る「白峯」と並んで、その「貧福論」の中に他編と通底する問題意識を見出し、そこから『雨月物語』所収九編相互の関係を総体的に捉える視座を得ることを考えたい。

### 一、現実状況に対する複眼的な認識態度

「貧福論」については従来、黄金の精霊たる翁の発言のうち、富貴貧賤をめぐる現実の不条理を論じる部分に主に注目が集まってきた。<sup>(3)</sup>しかし翁が語る論理は、その一部を見るのではなく、多面的な全体として見たときに初めて意味を持つと考えられる。<sup>(4)</sup>

翁はまず、下男の振る舞いを褒めた左内に「国の基」たる「金の徳」に対する考えの一致を見て、彼と語り合うために姿を見せる。二人は儒教を中心とする漢学的教養を背景にして、人が礼節に則り仁義を発揮する助けとなる富貴を「道」として語り合う。富貴貧賤をめぐる現実の不条理を論じるのは、その中の一部に過ぎない。

翁は富貴が「道」であることを力説した上で、善人が困窮し悪人が富み栄える不条理な現実状況にも諸種あることを整理して、その背後にある原理について一つ一つ説明を加えていく。これは、儒教を中心とする漢学の教養に基づく合理性によつては説明できない範囲を出来る限り追い込んで説明しようとしたものと捉えられる。それでも最後まで「道」とは異なる論理でしか説明できないものとして残るのが「不徳の人のたからを積」ことわりであるが、それは、「道」の働きに及ぶことができず「つかへ傳く事のうや／＼しきにあつまる」金銭の集散は、結果として人の行いの善悪に必ずしも対応しないからだと説明される。ただし、そのような「道」に外れた状況は、怪力乱神と同様、「道」を踐み行ふ君子がかかずらうべきものではない。翁の言わんとするところの全体は、このように捉えられるだろう。ここには、不条理さを抱えた複雑な現実状況に対する、複眼的で柔軟な認識と思考の態度があることを指摘できる。

内実や基準こそ変われ、どの時代、どの社会にも践み行ふべき「道」として人が求められる倫理や道徳があり、それに伴う善悪美醜の判断や感受性がある。秋成もそれを当然の前提としながら、しかし、それだけで割り切ることはしない。原理主義、教条主義に陥らず、かつ、全てを相対

主義の混沌に放り込むのではない。善人が必ずしも報われない現実の不条理から目を背けず、また既成の論理で割り切ることもせずに、そうした人々の不遇を共に嘆き憤る。その一方で、悪は悪としながら、その罪を犯した人々にも酌むべき事情があれば耳を傾け、そこにある哀れさを掬い上げる。よく知られるように秋成の批評眼は時に辛辣を極めるが、それと同時に、如上の人間を見る眼差しの優しさ、温かさがにじむところに秋成作品の魅力があると私は考えている。『雨月物語』もその例外ではない。依るべき「道」があることを確かな前提として見据えながら、それだけで割り切ることはしない「貧福論」の複眼的な現実認識のあり方もまた、この眼差しに確かに通じている。『雨月物語』所収九編相互の関係を総体的に把握することも、現実状況と人間に対する如上の複眼的な認識のありようを視座とすることによって可能になると考えられる。

ついで「白峯」を取り上げる。<sup>⑤</sup>「白峯」は、自らすすんで「魔道」を志し御霊と化していく崇徳院にも一定の理があることを見て取り、その内面を、生前に受けた数々の不当な仕打ちに対する院のやむにやまれぬ無念の思いに焦点化して描き出す。生前に受けた数々の不当な仕打ちに憤り、復讐へと駆り立てられる一方で、自らの所行の罪深さを思う。そう思った次の瞬間には、その真摯な悔恨の情をかつ

て不当にも踏みにじられた無念がまざまざと蘇る。そうした救いのない無惨な堂々巡りが、讃岐配流後の院の中で際限なく繰り返されていたのだと考えられる。

『雨月物語』成立以前を中心に、近世期の史書や軍書の類における保元の乱の扱いを見ると、「白峯」のような形で崇徳院を描くことは決して当然のことではなかった。当時の鑑戒史観から言えば、保元の乱という大事件の背景と顛末、特に首謀者たる崇徳院と頼長をはじめ、院側の人物に対する乱後の処分が記されていれば充分なのであって、近世までの史料、文献で讃岐配流後の崇徳院の動静に触れるのは、流布本『保元物語』、同異本四種（『参考保元平治物語』所引）、『源平盛衰記』、長門本『平家物語』、およびそれらに材を採った通俗史書や軍書の一部、ないし地誌の類などある程度限られる。讃岐配流後に注目して崇徳院の姿を描くことは、この段階で既に一つの選択であった。「白峯」における崇徳院の造形は流布本『保元物語』の表現に拠るところが大きいが、他にも半井本『保元物語』、通俗史書の『本朝通紀』や『保建大記』、地誌『四国偏礼霊場記』など多くの文献を参照していることは周知の通り。しかし「白峯」の選択は、そのいずれとも完全には重ならないことを指摘できる。秋成は、保元の乱に関する多くの文献を通じて様々にありえた歴史と向き合い、それらとの

対話を重ねる中から自分なりの崇徳院像を作り上げていった。そこには、歴史に向かい合う秋成の関心のありようが色濃く反映されている。

その結果として「白峯」が示すのは、自らも「罪深き」と自覚しながら、なぜ崇徳院は「道」を踏み外して天皇家と天下に祟り鎮魂を拒む御霊と化していったのかという問題意識である。善悪や罪、美醜などに対する常識的な道理や基準はあるべき理として認めながら、一方で、そうした理が通らない、あるいは理によつては割り切れない現実状況を凝視するという関心のあり方は、先に「貧福論」に見出した現実状況と人間に対する複眼的な認識のありようと同なるものと言える。それらはまた、後述する『雨月物語』の他編、さらにはそれ以降の秋成の著述活動にも通じていくものと思われる。

## 二、現実の不可測性への関心

第一節で『雨月物語』に通底するとした現実状況に対する問題意識や関心のあり方は、具体的には次のように大きく三分して把握できるだろう。見通しを兼ねて最初に掲げる。

① 現実の不可測性に対する関心が強く窺える作品：

「仏法僧」「吉備津の釜」「貧福論」

② 誰よりもよく倫理的な善、美徳を践み行つた人間であつても、それが報いられることの余りに少ない現実の理不尽さ、不条理に対する嘆きや憤りを示す作品：「菊花の約」「浅茅が宿」

③ 倫理的な判断として悪は悪としながらも、それを一方的に断罪して済ませるのではなく、自らの身に引き当てて考えたり、その罪を犯した者たちにも汲むべき事情があれば耳を傾け、そこにある哀れさを掬い上げたりするような柔軟な人間観を示す作品：「白峯」「夢底の鯉魚」「蛇性の姪」「青頭巾」

ただし、後述するように、①の作品群に見られる現実の不可測性に対する関心と、②③の作品群に見られる関心のあり方とは、相互に連続性を示しつつ、より広い問題意識と言える前者に後二者は包括される。三者の間に截然と境界を引けるわけではないことをはじめに断つておく。

以下、既に見た「白峯」「貧福論」を除いて、右に三分した作品群ごとに各々の問題意識がどのようなものであるかを具体的に述べる。まず、①現実の不可測性に対する関心が強く窺える作品として、「仏法僧」と「吉備津の釜」を取り上げる。

「仏法僧」には、高野山の深奥で讃仰する大師の靈威に包まれて穏やかに過ぐす昼の時間と、同じ靈威の中に身を置きながらも修羅道に堕ちた存在として殺伐たる闘争に駆り立てられる時間という二つの生を、交互に、それぞれに殆ど別人格と言つてよいあり方で生きる秀次一行の姿が描かれる<sup>⑦</sup>。そこに読み取れるのは、泰平の世を生きる人々のうちには高野山と弘法大師の靈威に対する讃仰の念があり、それによつて平生の心の平穏が支えられているが、その靈威に深く包まれ、自らそれを讃仰しているのであつてさえ、根本的には解放されない重い業を抱えた「修羅」たちの世界、夜の世界がこの世にはあるという認識である。この認識が読者に突きつける不気味さや不安こそが、「仏法僧」の怪異の本質だと考えられる。

この場合、抛るべきものが何もないから不安なのではない。むしろ、漠とした形であれ、日頃依拠している何らかの秩序や論理があるからこそ、それが通用しないものに遭遇したときの不安や不気味さは一層深いのである。こうした意味での怪異描写は、現実の不可測性に対する関心を強く示している。この関心のありようは、特に同じ巻三に収められた「吉備津の釜」の作品世界と密接につながっており、そこでさらなる展開を見せることになる<sup>⑧</sup>。

「吉備津の釜」において、後の惨劇はやむにやまれぬ機



「命祿」の問題へと連続していく転換点を示している。

また、夫に「信のかぎり」を尽くしながら報いられることなく、逆にそれを手ひどく踏みにじられた「怨み」から恐ろしい「鬼」に墮し、夫を取り殺すに至る磯良の内面を掘り下げたという点で、本編は、①の作品群に認められる現実の不可測性や不条理性に対する関心が、②の作品群における善人が報いられることの余りに少ない現実の不条理に対する関心のあり方や、③の作品群における悪行をなした者の内面にも酌むべき事情がありうることに目を向ける関心のあり方と、相互に連続し、重なり合うものであることを示す。「吉備津の釜」は如上の様々な問題意識や関心の結節点として、秋成における問題意識やモチーフ相互の関係とその変遷を考える上で重要な位置を占めると考えられる。

### 三、義士烈女たちの不遇

次に、②誰よりもよく美徳を践み行った人間であっても、それが報いられることの余りに少ない現実の理不尽さ、不条理に対する嘆きと憤りを示す作品として、「菊花の約」と「浅茅が宿」を取り上げる。

「菊花の約」に描かれる丈部左門と赤穴宗右衛門の信義の交わりをどう評価するかについて先行研究では議論が分

良の怨みゆえとしてその必然性が丹念に描き込まれる一方で、それはこの上なく貞節な彼女の内にも潜む「女の慳しき性」の発現として定位され、全ての端緒となった正太郎の「奸たる性」は本人にも意識できないところで彼を突き動かすものとして描かれる。また磯良の「慳しき性」の発現も彼女の意識の及ばない領域で起ったものと読める。女が「慳しき性」を募らせて鬼に墮するのは唾棄すべき事態であり、男はそうならないよう「おのれをよく脩めて教へ」なければならぬ、それが当時の観点からすれば正論だったことは動かない。ただ現実には、たとえそれを重々承知していても、また本人が進んでそうしようとしたのでなくとも人は不可避的に道を踏み外すことがあり得る。本編は正太郎と磯良の姿をそうしたものとして描く。「御釜祓」が示した凶兆に沿うようにして、避けがたく破壊へと向かっていった事態の背後には、何のためにそうするのか理解できない人知を越えた論理として吉備津の神意が重ね合わされている。

こうした現実の不可測性や不条理に対する意識という点で、本編には「仏法僧」や「貧福論」と重なる問題意識が認められる。本編は、初期浮世草子二作品における「氣質」認識の方法を発展的に継承した「性」認識が、さらに現実の不可測性、不条理性に対する意識、ひいては後年の

かれるが、私見では、二人の交友は読者の好意と共感を得られるように描かれたと考えられる。ただし、本編はかつて言われたような信義の美談ではない。二人の死を美化するのはたやすいが、本編はむしろ、そうした美化によって隠蔽されやすい二人の信義の悲しさにこそ目を向けようとしている<sup>⑩</sup>。

「菊花の約」の語り手は、典拠「范巨卿雞黍死生交」を踏まえて二人の信義の交わりを読者の共感を得られるように描きながら、末尾では典拠から大きく離れ、二人の信義を顕彰する美談としては語らないことをあえて選んでいる。その結果として本編に描き出されたのは、誰よりもよくそれを実践しながら、報いられることの余りに少なかった二人の信義の悲劇であった。作品冒頭のごく常識的な戒めを踏まえた末尾の一節には、信義という美德を貫いた人が報いられることの余りに少ない現実の理不尽さに対する嘆きと憤りが込められている。

このように善人の不遇という形で現れる現実の理不尽さに対する関心は、秋成の浮世草子二作品に始まり晩年の学問的著述に至るまで生涯に涉って見られるものである<sup>⑪</sup>。

『雨月物語』でも「貧福論」「浅茅が宿」「吉備津の釜」などに同様の問題意識や関心を見出せる。「菊花の約」は、そうした秋成の生涯に涉る問題意識の流れの中にある作品

の一つとして位置づけられる。

「浅茅が宿」は、夫が亡き妻を恋うる哀傷の構図<sup>⑫</sup>を枠組みとして、戦乱の中でひとり夫を信じ待ち続けた宮木の貞節の美しさと、それが何一つ報いられることなく孤独と痛ましい絶望の中で焦がれ死にをした彼女の哀れさを描く。

ただし、生前死後に涉る宮木の辛苦、夫への思慕の情と疑心との葛藤、不安、孤独、絶望、愛執、晴れることのない恨み等の思いは、恐らく宮木一人のものではない。宮木においてそれらは複雑に入り交じり渾然一体となった思いだったが、その一部あるいは全部が、不条理にも戦渦に巻き込まれた名も無き人々、特に女性たちが抱えた思いでもありえた。また、作品末尾で勝四郎がたどたどしい和歌に込めた深い哀傷の念についても、やはり同様に、戦渦に巻き込まれ愛する人を失った名も無き人々の思いでありえた。

「浅茅が宿」が時代設定で直接拠った『重編応仁記』など軍書との関係<sup>⑬</sup>で捉え直せば、本編は戦渦に巻き込まれ、過酷な状況に生きること強いられながら、軍書をはじめ記録には殆ど何も残らなかった庶民の姿に焦点を当て、その内面を掘り下げた作品として読み解ける。「浅茅が宿」は主要な典拠とした『剪燈新話』や『伽婢子』に倣い、記録には殆ど何も残らなかった名も無き人々に戦乱がもたらした悲劇について、ありえた歴史の一齣を描く作品の系譜



に連なる一つと位置づけられる。<sup>15)</sup>

ただし、「浅茅が宿」が末尾に至って典拠「愛卿伝」から大きく離れた展開を見せることは、その死後、男子への転生と夫との再会という形で女の生前の貞節が報いられることを無邪気な樂觀として拒否したことを意味する。『伽婢子』『遊女宮木野』が「愛卿伝」を翻案するに際してこの結末を捨てていないことを見れば、本編の語り手は「菊花の約」のそれと同様に、過酷な状況の中にあつてなお夫を慕い続け、その帰りを待ち続けた宮木の貞節の美しさを読者の共感を得られるように描きながら、それが予定調和的に報いられるようには語らないことをあえて選んでいると言つてよい。本編は、その哀れな貞節が何一つ報いられることなく孤独と絶望の中で焦がれ死にしていくなという現実の理不尽さを、「宮木の「人知れぬ恨み」「旧しき恨み」に託して描いている。<sup>16)</sup> そのように善人が踏みこじられる現実の理不尽さや不条理への強い関心を示すという点で、本編は「菊花の約」や「吉備津の釜」、「貧福論」の作品世界に通じているのである。

#### 四、罪悪を犯した者たちへの眼差し

次に、③倫理的に悪は悪とはつきり見定めながらも、それを一方的に断罪して済ませるのではなく、自らの身に引

き当てて考えたり、その罪を犯した者たちにも酌むべき事情があれば耳を傾け、そこにある哀れさを掬い上げたりするといった柔軟な人間観を示す作品として、「夢応の鯉魚」「蛇性の姪」「青頭巾」の三編を取り上げる。

「夢応の鯉魚」について論じた先行研究では、興義が日頃から「魚の遊躍」姿に強く惹かれ、ついに鯉となつて琵琶湖を逍遙することが、彼の「自由」への憧れとその実現として肯定的に扱われることが多い。<sup>17)</sup> だが本編冒頭において「魚の遊び」への執着を抱える興義は、その他の点でも仏道修行者として欠けるところがないとは言い難い人物として形象されている。<sup>18)</sup> 本編が放生の功德による異類報恩という仏教説話的な枠組みを持つことに注目すれば、執着に囚われた興義に、河伯があえて「権に金鯉が服を授けて水府のたのしみ」を許したのは、頭を切り落とされる恐怖を体験させ、「放生の功德」多い彼に自らのありようを省み執着から離れる機会を与えるための「権」の方便だったと解される。ただし、そのことがすなわち本編における興義の肉身的な成長を保証するわけではない。恐怖を味わい蘇生した直後であるにも拘わらず、なお自ら体験した「魚の遊び」の快さを思い浮かべるように琵琶湖周遊の様を樂しげに回想して語ってしまう彼が、その執着を捨て去り、悟りを深めることができたとは到底考えられない。実際、彼

が「神妙」の画境を見せたのはやはり鯉の絵においてであった。興義は蘇生後もなお「魚の遊躍」姿に強く惹かれ、こだわり続けたのであり、その意味で冒頭の時点と比べて彼が執着を離れた形跡は認められない。

本編にはこうした興義が囚われた執着の根深さ、ひいては人間の愚かさ、業の深さが一本の縦糸として描き込まれている。本編が仏教説話的な枠組みを明瞭に持つのも、その枠組みを強調することで、逆に型通りには執着から離れられない興義の弱さ、愚かさを浮かび上がらせる効果を狙ったものと考えられる。

ただし、それはあくまで明るい奇談として示される。末尾に置かれた興義の終焉をめぐる逸話を見れば、遂に執着を離れられなかった彼を作品が最終的には責めようとしていないことは明らかであろう。作品末尾での描き方を見る限り、興義が見せたような人間の弱さや愚かさは、肯定はされないまでも許されていると言つてよい。あたかも作者が、我が身にも引き当てながら、全く仕方がないことだと微苦笑を漏らしているかのようである。このように、人間の弱さや愚かさはそれとしてしっかりと見定めつつも、それを突き放したり、厳しく批判して終わりとしたりするのではなく、そうした人間を見つめる眼差しにむしろ優しさや温かさを感じさせるところに「夢応の鯉魚」の特徴があ

ると考えられる。

次に「蛇性の姪」を見る。<sup>20</sup> 中村幸彦氏が述べたように、本編をもつばら教養小説的枠組によって捉えるなら、真女子はその「姪なる」妖異性をより強調され、克服されるべき「邪神」として否定的に把握されることになる。だが作品中しばしば、「文章の美しさ」と相俟つて、豊雄のみならず読者にとつても魅力的な「女しき」真女子の姿が描かれることも確かである。<sup>21</sup> ただ、後者の側面が近年の論考では強調され過ぎたきらいがある。<sup>22</sup> 私見では、真女子の恐ろしい「邪神」としての側面と「女しき」側面とは、他方の印象を弱めて一方のみが前景化されるのではなく、むしろ相反するかに見える正負二面がそれぞれにその存在を主張するようにして彼女の一身に併存する、そうした緊張関係において描出されていると考えられる。

罪無き人々にも危害を加えるに至つた真女子が作品末尾で永遠に封印されるのは、異類婚姻譚の当為を踏襲するのではなくても当然の帰結と言える。そこには、真女子をみだらで邪悪な妖異としてしっかりと見定める眼差しがある。ただし、真女子が豊雄に向けた一途な愛情を思うとき、そこには一抹の哀れさが漂う。「蛇性の姪」は人ならぬ真女子の造形を通じて、逆説的に、執着と一途な愛情という正負両面を分かちがたいものとして併せ持ち、両者を一身で

体現する不可思議な存在として一人の女性の姿を見事に描き出した。それは「浅茅が宿」の宮木とも「吉備津の釜」の磯良とも異なる、不可思議さゆえの魅力という『雨月物語』におけるもう一つの女性認識を示す。それはまた、ある一つの基準・観点からするのでは割り切れない現実の一具体相の表現としても捉えられる。こうした真女子の造型のありようには、「貧福論」をはじめとする他編にも通じる、割り切れない現実状況を複眼的に捉えようとする認識態度を窺うことができるだろう。

最後に「青頭巾」を取り上げる。「青頭巾」は、仏法に救いを求める異神・妖魔の高僧による救済に絡めて禅利の開創や中興の縁起を語る禅林説話の基本パターンを踏襲している。<sup>24</sup>両者の照応関係を確認した上で、その差異について検討すると、前者にあつて後者にない二点、すなわち高僧による救済の対象となる院主が鬼畜に墮罪して里人に害をなすに至る所以・経緯を述べるのに大きく筆を費やしている点、および「浅ましき悪業を頓にわするべきことわり」として二句の証道歌を授けられた後もなお、一年の長きにわたつて院主が苦趣を免れずにいる点を本編の特徴として指摘できる。この二点はいずれも、人の屍肉を喰らう鬼畜となつた院主が内面に抱える悲哀や苦悩を描き出すことに関わる設定である。

この独自の設定によつて本編は、禅林説話では詳述されない妖魔の「苦趣」に注目し、その内面を掘り下げることでできた。食人鬼に墮した院主の罪深さと浅ましさをしっかりと描き込みながらも一方的な断罪はせず、そうした悪行をなす者のうちにある深い悲しみと苦悩、その哀れさを目を向けたところに「青頭巾」の特徴がある。

このように倫理的に悪は悪とはつきり見定めながらも、それを一方的に断罪して済ませるのではなく、その罪を犯した者たちにも酌むべき事情があれば耳を傾け、そこにある哀れさを掬い上げたりするといった柔軟な人間観を示すという点で、本編と「白峯」や「夢応の鯉魚」、「蛇性の姪」などの作品世界とは通じていると考えられる。

##### 五、『雨月物語』所収九編相互の関係性

前節までに述べたことを踏まえて、最後に『雨月物語』所収九編相互の関係性が総体的にどのような捉えられるかについて述べる。

「貧福論」や「仏法僧」に見出される現実の不可測性や不条理に対する関心は、人は自ら望まなくとも不可避的に道を踏み外すことがあり得るという不気味な現実認識を示す「吉備津の釜」において、倫理・道德などの人としてなすべき道と人間の「性」との関係性を問うことへと発展を見

せる。その「吉備津の釜」の作品世界はさらに、誰よりもよく美徳を践み行った人間であつても、それが報いられることの余りに少ない現実の理不尽さや不条理を詠嘆的に描く「菊花の約」や「浅茅が宿」、また、悪は悪としながら一方的に断罪して済ませるのではなく、自らの身に引き当てて考え、罪を犯した者たちのうちにある苦悩や悲哀にも目を向ける「白峯」「夢応の鯉魚」「蛇性の姪」「青頭巾」へと連続している。そして、その全てに通じるものとして、常識としての漢学的教養に基づき、依るべき「道」があることを確かな前提として見据えながら、それで割り切ることはしない、不条理さを抱えた複雑な現実状況に対する複眼的で柔軟な認識と思考態度があり、その端々に滲む人間を見る眼差しの優しさ、温かさに『雨月物語』の魅力がある。これが、本稿の提示する『雨月物語』の全体像である。ただし、右に述べた『雨月物語』所収九編の関係性を示す流れは、あくまで全体像の把握を容易にするための見取り図であり、各編の成立順を言おうとするものではない。通説通り、九編のうち「白峯」の成立が最も早いと考えられること<sup>(25)</sup>、および入木訂正痕を見る限り巻一にだけ固有名詞を含む本文の訂正が行われており、「白峯」と並んで「菊花の約」の成立が他巻所収の作品よりも早い可能性があること以外、成立順についてはわからない。

また、第二節でも述べたように、①の作品群における現実の不可測性に対する関心と、②③の作品群における関心のありようとは、相互に連続性を示しつつ、より広い問題意識と言える前者に後二者は包括され、重なり合うものと言える。三者の区分は必ずしも確定的なものではなく、流動的であつてよい。右に示した関係性の流れを軸として、所収九編それぞれが他の各編と緩やかに繋がり合いながら『雨月物語』の全体像を形成していると考えたい。

なお、現実の理不尽さや不条理への関心は初期浮世草子二作品において既に見出されるものだが、「白峯」は、そうした現実のありように対する関心が、秋成において歴史の問題と結びついた始発点として位置づけられる。同様の関心は、「菊花の約」や「浅茅が宿」にも認められるだろう。秋成が『雨月物語』の後は創作活動からやや離れ、古代史と密接に関わる和学に打ち込んでいく経緯や内的な必然性を、如上の意味での歴史に対する関心という観点から跡づけることができると思われる。その際には、軍書や通俗史書をはじめ、歴史をめぐる同時代の様々な言説を検討し、その中に秋成の著述活動を位置づける作業が必要となるだろう。この点については「白峯」を論じて以降いまだに議論を深められていない。今後の課題としたい。

\*秋成作品の引用・参照は、『上田秋成全集』（既刊十二冊、中央公論社、1990・8～1995・9）による。引用に際して適宜振り仮名を省略し、一部漢字を通行の字体に改めるなど、本文を改めたところがある。

## 注

(1) 『雨月物語』所収九編について論じた拙稿は次の通り。『雨月物語』での作品配列順に掲げ、通し番号を付す。

A 「歴史との対話―「白峯」論」（『日本文芸論叢』19、2010・3）

B 「信義の行方―「菊花の約」論」（『文化』72・3・4、2010・3）

C 「浅茅が宿」における哀傷の構図―丹後国風土記逸文との関係を視野に収めて―（『日本文芸論叢』12、1998・3）

D 「浅茅が宿」を読む―やつれ果てた宮木の霊の姿から―（『日本文学』57・12、2008・12）

E 「浅茅が宿」篇名小考（『弘学大語文』38、2012・3）

F 「那の重き業障―「夢応の鯉魚」論―」（『日本文芸論叢』16、2002・3）

G 「雨月物語」「夢応の鯉魚」に描かれた鯉（鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史―日本古典の自然観4 魚の巻』、三弥井書店、2012・7）

H 「秘密の山と修羅―「仏法僧」論―」（『日本文芸論叢』17・18合併号、2004・3）

I 「性」と「神」―「吉備津の釜」論―（『日本文芸論叢』15、2001・3）

叢」15、2001・3）

J 「女しき」と「姪なる」ことのあいだ―「蛇性の姪」論―（『日本文芸論稿』29、2005・3）

K 「影のやうなる人―「青頭巾」論―」（『日本文芸論稿』26、1999・10）

L 「貧福論」考―その複眼的な認識のあり方について―（『文芸研究』171、2011・3）

行論の都合上、本稿では右の拙稿で述べた私見を必要に応じて再述することを予めお断りしておく。

なお「浅茅が宿」について論じた拙稿Eでは、前稿Dでの考察を踏まえ、篇名に込められた意味と作品全体の把握について前稿Cの見解を大きく訂正している。また「夢応の鯉魚」を論じた拙稿Gでは、作品に描かれた鯉をどう捉えるかについて、前稿Fでの見解を一部訂正している。拙稿C・D・E、およびF・Gは各々併せて参照されたい。

## (2)

具体的には、「浅茅が宿」の宮木に重ねられた「水の女」のイメージから興義が鯉となつて水中に身を躍らせる「夢応の鯉魚」へ、夢然父子が修羅道に堕ちた秀次一行と「不思議の御目見え」をする「仏法僧」から磯良が「めづらしくもあひ見奉るものかな」と口にする「不思議な対面」の場面を持つ「吉備津の釜」へ、「青頭巾」で院主が開悟する契機となつた「唱導歌の詩偈」から同じく「一種の詩偈」によつて岡左内が未来を悟る「貧福論」へという形で「連環的構成」を説明するところなどを指す。なお詳細は『日本古典文学全集 英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』「解説」に直接当たられたい。

(3) 重友毅「『貧福論』の解釈」（同氏著『秋成の研究』、文理

- 書院、1971・5、初出『国語と国文学』12・7、1935・7）、鶴月洋著・中村博保補筆『雨月物語評釈』（角川書店、1969・3）、青木正次著『講談社学術文庫 全訳注 雨月物語（下）』（講談社、1981・6）、矢野公和著『雨月物語私論』（岩波ブックセンター、1987・12）、田中則雄「上田秋成と当代思潮―不遇認識と学問観の背景―」（『国語国文』60・7、1991・7）、井上泰至「『貧福論』の風刺」（同氏著『雨月物語論―源泉と主題』、笠間書院、1999・4、初出『読本研究』8、1994・9）など参照。
- （4）『貧福論』に関する以下の私見は、注（1）前掲拙稿Lに基づく。
- （5）『白峯』に関する以下の私見は、注（1）前掲拙稿Aに基づく。
- （6）小山一成「『雨月物語』（『白峯』）と『白峯寺縁起』および『四国偏礼霊場記』」（『立正大学国語国文』11、1975・3）、若木太一「『白峯』の造型―典故からの遡源―」および「同 補注・訂正」（『近世文芸』32、1980・3、『近世文芸』34、1981・5）、井上泰至「『白峯』の王道論とその背景」（同氏注（3）前掲書、初出『上智大学国文学論集』19、1986・1）など参照。
- （7）『仏法僧』に関する以下の私見は、注（1）前掲拙稿Hに基づく。
- （8）『吉備津の釜』に関する以下の私見は、注（1）前掲拙稿Iに基づく。
- （9）長島弘明「男と女の『性』（同氏著『秋成研究』、東京大学出版会、2000・9、初出『国文学』40・7、1999・6）

- （10）『菊花の約』に関する先行論は、大きくは次の三つの立場に分けられる。
- ① 本編を丈部左門と赤穴宗右衛門との信義の美談と見る立場（重友毅著『雨月物語評釈』（明治書院、1957・10）、中村幸彦「本文鑑賞 菊花の約」（同氏編『日本古典鑑賞講座 秋成』（角川書店、1958・9）など）。
- ② 二人が各々に欠陥を抱えた人間であるとし、その関係も批判的に捉える立場（青木正次著『講談社学術文庫 全訳注 雨月物語（上）』（講談社、1981・6）、矢野公和「菊花の約」（同氏注（3）前掲書、初出『共立女子大学文学科紀要』28、1985・2、原題「親愛なる者へ」など）。
- ③ 二人の信義をあまりに厳格、極端なものとして、相対化して捉える立場（木越治「『菊花の約』私案」（同氏著『秋成論』、ベリかん社、1995・5、初出『国語通信』268、1984・9）など）。
- （11）『菊花の約』に関する以下の私見は、注（1）前掲拙稿Bに基づく。
- （12）日野龍夫「老境の秋成」（『日野龍夫著作集第二巻 宣長・秋成・蕪村』、ベリかん社、2002・5、初出『文学』49・6、1981・6）、および田中氏注（3）前掲論文参照。
- （13）注（1）前掲拙稿C参照。
- （14）今泉忠義『雨月物語精解』（技報堂、1950・2、のち『秋成研究資料集成第9巻』（クレス出版、2003・1）に再録）121ページ、井上泰至「『雨月物語』の時代設定―『軍書』との関係について」（同氏注（3）前掲書、初出『読本研究』51上、1991・9）参照。
- （15）注（1）前掲拙稿D参照。



(16) 注(1)前掲拙稿E参照。

(17) 『夢応の鯉魚』に関する主な先行研究として、森山重雄著

『日本文学新書 雨月物語・春雨物語』(創元社、1956・6)、中村幸彦校注『日本古典文学大系 上田秋成集』

(岩波書店、1959・7)「解説」、鶴月氏注(3)前掲書の

「解説」(中村博保氏執筆)、勝倉壽一著『雨月物語構想論』

(教育出版センター、1977・9)、矢野氏注(3)前掲書、

高田衛・稲田篤信校注『ちくま学芸文庫 雨月物語』(筑摩

書房、1997・10)、井上泰至「夢応の鯉魚」試論・付

葛蛇玉について」(同氏注(3)前掲書)など参照。このうち

勝倉氏に、琵琶湖逍遙の場面は「自由の絶対境などではない」とする見解があつて注目される。

(18) 「夢応の鯉魚」に関する以下の私見は、注(1)前掲拙稿

F・Gに基づく。

(19) 鶴月氏注(3)前掲書「解説」(中村博保氏執筆)296、299ペ

ージ、鷺山樹心「夢応の鯉魚」考」(同氏著『秋成文学の思

想』、法蔵館、1979・1、初出『花園大学国文学論究』

3、1975・10、原題「雨月物語「夢応の鯉魚」の構想に

ついて」など参照。

(20) 「蛇性の姪」に関する以下の私見は、注(1)前掲拙稿Jに

基づく。

(21) 中村幸彦「本文鑑賞 蛇性の姪」(同氏注(10)前掲書)

(22) 「蛇性の姪」に関する主な先行研究として、中村幸彦氏注

(21)前掲「本文鑑賞 蛇性の姪」の他、鶴月洋「蛇性の姪」

の文学的価値―「雨月物語」研究ノート―」『文学』33・5、

1965・5、勝倉氏注(17)前掲書、矢野氏注(10)前掲書、

島田彩司「磯良の闇と豊雄の闇―『雨月物語』の構図」(『明

治学院論叢』458、1990・3)、木越治「夢」のあと

に―「蛇性の姪」試論」(『国語と国文学』77・8、200

0・8)など参照。

(23) 「青頭巾」に関する以下の私見は、注(1)前掲拙稿Kに基

づく。

(24) 堤邦彦「雨月物語」「青頭巾」と青衣裁冠の得脱者―近世

後期小説への展望」(同氏著『近世仏教説話の研究』、翰林書

房、1996・7、初出『芸文研究』65、1994・3)

(25) 重友毅「怪談小説としての『雨月物語』」(同氏著『秋成の

研究』、文理書院、1971・5、初出『日本文学研究』1、

1936・1、原題「雨月物語評論」の32、35ページ、高

田衛「白峯」の成立と雨月物語の原型―「西行はなし歌枕

染風呂敷」をめぐる―」(『近世文芸』4、1957・3)

など参照。

(26) 中村幸彦「秋成に描かれた人々」(『中村幸彦著述集第六

巻』、中央公論社、1982・9、初出『国語国文』32・6、

1963・6)、高木元「読本の校合―板本の象嵌跡―」(同

氏著『江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷』、ペリかん社、

1995・10、初出「読本研究」6・上、1992・9)

\*本稿は、2010(平成22)年3月26日付けで東北大学に提出

した博士学位論文「『雨月物語』論」終章の一部に基づき、加

筆訂正したものである。